

「彼女らの美しき生活」はギター・デュオのための12の小曲集で、少女たち、というより小さな女の子たちが少女と呼ばれ始める頃までの、彼女らの折々の生活、その戯れと夢を主題にしています。それは私の娘たちの面影であると同時に、私自身のおぼろな記憶、或いはもし再びその時代を取り戻せるのなら、こんなふうにご覧したいという願望の顕れなのかもしれません。ただ、それだけではなく、その年頃の女の子達が、ひとりひとり生まれながらに受け取っており、未だ、蔑みや、それに対する苛立ちによって傷付けられたり歪められたりしていない、聖らかで素朴な愛の花、「無限なるもの」との静かな結びつきを、いくばくかでも描き出すことによって、願わくば、それが損われることなく、美と慈しみの中に深い力を蔵して、完成へと近付いていかれるようにという祈りを捧げたいのです。

道端の小さな草が、奥ゆかしいといってよいような、地味な花を付けているのを発見した時の彼女らの喜ばしい驚きや、夏の終わりに、綺麗な羽根の蝶や蝉たちの地に堕ちた亡骸をしばしば目にして物哀しく黙り込むようす、ふと見上げた木々の繁った葉群の隙間に、丸々としてまだ青い実を見つけて有頂天の歡びに顔を輝やかせる瞬間。平凡なものを軽蔑しない、それを愛し、「無限なるもの」と結びついた謙虚な美を見出す心、その敏感さゆえに、彼女らはまた、絶えず苦しみもするのです。

科学によってより一層男性的になり、権力と富と機構の飽く無き追求によって均衡を失い、破壊的になった文明において、彼女らは悲しみを絶えず享受せねばなりません。だからといって自らの感情をにぶらせたり、汚したりせずに生きていかれるならば、干からびた光景に生命の優美さと穏やかさを生じさせることができるでしょう。小さいものの寂しい心、その無言の慟哭は針のように細い雨の筋となって、高度な理性に達した強靱な大人の魂にさえも、沁みとおっていくのですから。

© 藤家溪子